尾崎翠「歩行」論 ―屋根裏部屋の彷徨者―

金夏娟（本学院生）

本発表は、一九三一年に発表された尾崎翠の短編小説「歩行」を分析対象とし、失恋というモチーフと、近代における歩くという行為に焦点を当てることにより、そのなかに描かれている近代的女性像を考察することを目的とする。

特に作品のもつ円環構造に注目し、これまでの研究では消極的なものとして否定的に捉えられてきた屋根裏部屋への帰還が、女主人公「私」の主体的な選択であったことを明らかにし、そのような行為のなかに、女性表現者としての可能性が映し出されていることを論じる。

一九三〇年代の近代家父長制においては、社会システム存続のため、女性は産むこと、つまり次世代再生産を強要された。しかし尾崎翠作品の女主人公は、失恋することにより、むしろ生殖器を通じた次世代再生産に繋がる恋愛を避けていると読み取れる。そして、産むことを強要する社会秩序に身を置きながらも、その秩序から逃れ出ようとする苦悩の中で選び取られる選択は、歩行の過程を通して明らかにされるのである。

実現できない恋ばかりに夢中な「私」の行為は、一見、社会的に何の役にも立たないものである。だが、そのことはむしろ、悲しい失恋の物語としてとらえられがちなこの作品が、実は現実社会に対する反抗の姿勢を隠し持っていることを明らかにするだろう。「歩行」が、家父長的な社会秩序に向かって密かな対抗の姿勢を取ろうとする、近代女性の苦闘の様相が描かれた作品であることを示そうと考える。